

第80回高前定期戦観戦記

『本当に、やってのけた。』

すべての競技が終わり、放心状態のままグラウンドへ向かいながら、この一日の戦いを振り返ったとき、最初に浮かんだのは、その言葉だった。

前橋高校との恒例の高前定期戦は、今年で80回目を迎えた。

しかし、今年の高高にとって、その道のりは決して平坦ではなかった。

前哨戦となる部対抗は、惜しい試合をいくつも落とし3勝6敗。特に硬式野球部と軟式野球部は、いずれも9回表までリードしながら、最後の最後にサヨナラ負け。悔しさの残る敗戦であった。

しかもどちらの試合でも、前高は実行委員を中心とした応援に一体感があり、実力が互角であっても、いつの間にか試合の空気を支配されてしまう。高高は、その勢いに抗しきれない印象が残った。

今年の開催地は前橋高校。いかにアウェー感を跳ね返し、ホームと同じ空気をつくって戦えるか。これが一つ目の課題であった。

そして、もう一つ大きな問題があった。

18点差。これまでの高前定期戦では、高高が部対抗でリードを奪い、一般対抗でそのリードを守り切るという展開が一つの勝ちパターンだった。

ところが今年は、前哨戦の部対抗は3勝6敗。得点では高高18－36前高。実に18点のビハインドを背負って、本戦を戦うことになった。

一般対抗は10競技。すべて学年対抗で、バスケットボールやバレーボールのように学年ごとに複数チームがある競技では、勝敗一つがそのまま得点になる。ソフトボールやソフトテニスのように、学年ごとの勝敗で得点を総取りする競技もある。

18点を追い上げるのは、簡単なことではない。それでも、勝機がないわけではない。

まずは午前中に少しずつ差を縮める。そして午後、これまで苦手としてきた競技で前高を上回る。

すべてに勝つ必要はない。「高高はしぶとい」そう前高に思わせることができれば、流れは変わる。

18点差からの逆襲。

高高の「背水の陣」の戦いが始まった。

定期戦当日の朝。

午前7時30分より前橋高校正門前で、両校の応援部・応援団による「睨み合い」が行われた。その後には、実行委員長によるバナナとトウモロコシの早食い。山猿と白豚にたえられる両校の好物ということだろうか。この「睨み合い」で、高高は前高を上回る人数が集まり、声出しでも圧倒した。

「これなら、もしかしたら——。」

そんな期待を抱かせるスタートだった。

午前8時30分、開会式。式典が行われている間にも、体育館からは気合の入った声が響

いてくる。1年生のバスケットボールが、スタートダッシュを決めるべく9時のホイッスルを待っていた。

そして、1年A・Bチームが連勝。これ以上ないスタートを切った。

その後もバスケットボールは高高が優勢に試合を進め、全体で7-2の完勝。

しかし、すべてが順調に進んだわけではない。

1年ソフトボールは0-3。駅伝も善戦したものの、勝利したのは2年のみで3-6。1年ソフトテニスも0-3。せっかくなつかみかけた流れが、再び前高へ傾きかけていた。

ここで高高が意地を見せた。午前中に行われた残りの部対抗3競技である。剣道は惜しくも敗れたが、弓道が接戦を制して勝利。

そして、柔道。5人制の対抗戦に対し、高高はけが人もあり、出場できたのはわずか3人。それでも2人が勝利し、勝負は大将戦にもつれ込んだ。

残り1分を切ってもリードを許していた高高。

ところが、残り20数秒。

一本。

勝負をひっくり返した。

聞けば、その選手は高校から柔道を始めたという。

まさに、起死回生の一本だった。

柔道も勝利し、総得点は高高40-56前高。

その後、2年ソフトボールが勝利。さらに2年ソフトテニスも勝利。そして県民健康科学大学で行われていた卓球から「5-4で勝利」との報告が飛び込んできた。

総得点は、高高51-60前高。18点あった差が、9点まで縮まった。苦手としてきた一般対抗で、離されない。少しずつ、確実に追いつけている。「ひょっとしたら、届くのではないか。」そんな空気が、少しずつ高高全体に広がっていった。

しかし、前高も簡単には崩れない。

3年ソフトテニスは前高が勝利。陸上競技もリレーを残して2-4と高高が劣勢に立った。だが、ここで1年バレーボールが3タテを決め、3-0。

昼前の時点で、高高56-67前高。まだ11点差。届きそうで、届かない。

それでも、高高は粘っていた。

午後の競技は、学年対抗のリレー、2・3年バレーボール、3年ソフトボール、部対抗のソフトテニス、そして綱引き、長縄、玉入れ。昨年、高高が大きく敗れた競技が続く。ここからが本当の勝負だった。3連敗で終わりがたくない。最後の学年となった3年生が、自分たちの手で勝利を引き寄せる。そんな思いが、グラウンドや体育館のあちこちから伝わってくるようだった。

午後最初のリレー。高高が3学年すべてで勝利し、陸上競技は最終的に5-4で勝利。

そして、昨年3学年すべてで敗れた綱引き。

ピストルの合図とともに力強く綱を引き、1年生がまず勝利した。「今年はいける！」応援の高高生からそんな声上がる。2年生は惜しくも敗れ、勝負は3年生へ。

過去2年間、一度も勝てなかった3年生が、ここで意地を見せた。執念の勝利。

高高の生徒たちから、大きな雄叫びが上がった。

この時点で、高高65-70前高。朝の時点では背中すら見えなかった前高を、ついに射程

圏内にとらえた。

その後、長縄は2－4で敗れたものの、部対抗のソフトテニスで勝利して6点を追加。3年ソフトボールは敗れたが、2・3年バレーボールが5－1で勝利した。

そして――。

最後の玉入れを残して、高高78－78前高。ついに並んだ。

近年まれに見る大接戦となった。

しかも、最後に残ったのは、過去2年間、0－9、0－9と完敗している玉入れだった。

体育館前で準備をする前高生からは、「玉入れなら大丈夫だろう」と、勝利を確信する声も聞こえていた。

しかし、この日ばかりは玉入れもただの玉入れではなかった。

80回の歴史を持つ定期戦。その最後の勝敗を決める競技となった。

体育館は超満員。

中に入りきれず、外で生徒たちの歓声を聞くギャラリー也大勢いた。

「1、2、3……101、102――」 飛び交う玉。上がる歓声。応援の声。

まず1年生。3回の競技のうち2回目こそ引き分けたが、1、3回目の玉数が上回り、見事勝利。

高高が総合優勝に王手をかけた。

続く2年生は前高が勝利。

総合優勝の行方は、大トリとなった3年生の一戦に託された。

この展開を、誰が予想しただろうか。

会場内外のボルテージは、この日、最高潮に達していた。

3年生、1本目。

高高が7ポイントのリードを奪った。2本目。その差を34ポイントまで広げた。

そして、最後の3本目。終了の合図。籠の中を見る。もう、勝敗は明らかだった。

高崎高校、劇的な逆転勝利。その瞬間、歓声が体育館を包んだ。

振り返れば、今年の高前定期戦は、最初から高高にとって厳しい戦いだった。

部対抗では3勝6敗。18点のビハインド。昨年大敗した競技も残っていた。

開催地は前橋高校。決して、高高にとって有利な状況ではなかった。

それでも、生徒たちは最後まで諦めなかった。

一つ勝ち、また一つ勝つ。負けても、次の競技で取り返す。

点差が縮まれば、応援の声が大きくなる。応援の声が大きくなれば、選手の背中を押す。

そしてまた、次の一勝が生まれる。そうやって、18点あった差は一つずつ、一つずつ消えていった。

もし、高高が連勝を続けていたなら、定期戦で勝つことの意味を、これほど強く感じることはなかったかもしれない。

負ける悔しさを知っているからこそ、追いつける苦しさを分かっているからこそ、最後まで諦めずに戦うことの意味が分かる。苦しいときに踏みとどまり、仲間を信じ、最後まで戦い抜けば、流れを変えることができる。そのことを、今年の高高生は実証してみせた。

高前の定期戦Tシャツに書かれた四文字熟語は「龍攘虎搏」

前高の定期戦Tシャツに書かれた四文字熟語は「龍拏虎擲」

奇しくもどちらのTシャツにも龍と虎の文字が並んだ。互いが互いの実力を認め、全力でぶつかり合うからこそ、この定期戦は80年もの長きにわたり続いてきた。

今年の第80回高前定期戦は、高前の劇的な逆転勝利で幕を閉じた。

しかし、本当に大切なのは勝敗だけではない。

80年にわたって両校の先輩たちが築いてきたこの伝統を、今を生きる私たちが受け継ぎ、そして次の世代へと渡していくことにこそ、定期戦の意味がある。

勝つ喜びも、負ける悔しさも、すべてを力に変えて、これからも高前と前高が互いに切磋琢磨しながら、この素晴らしい定期戦を紡いでいってほしい。

第80回の歴史を刻んだ高前生、そして前高生に、心から拍手を送りたい。

